東京都江戸東京博物館紀要　第３号　2013年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 3, P. 69－97, March, 2013

斎藤月岑の「武江扁額縮圖」をめぐって
―東北大学附属図書館狩野亨吉文庫「大江戸絵馬集」を中心に―

小　澤　　弘*

目　次

はじめに
１．東北大学附属図書館狩野亨吉文庫の「大江戸絵馬集」
２．斎藤月岑
３．斎藤月岑の「武江扁額縮圖」
４．斎藤月岑日記に見る絵馬・扁額調べ
５．山内天真と「東都繪馬鑑」
６．浅草寺絵馬･扁額と月岑の「武江扁額縮圖」
おわりに

キーワード　斎藤月岑　武江扁額縮圖　扁額　絵馬　縮図　摸写
江戸の絵馬　額堂　絵馬堂　狩野亨吉　山内天真　東北大学
浅草寺　東都繪馬鑑　斎藤月岑日記

はじめに

当館都市歴史研究室では、従来から他の博物館、美術館、大学、研究機関などと共同研究を行ってきた。その中で平成17年度から東北大学及び同大学附属図書館とも、「古典の百科全書」「江戸学の宝庫」と言われる狩野亨吉文庫に関する共同研究を行い[1)]、その成果の一端は狩野文庫の資料を中心とした東北大学附属図書館主催の展示会や講演会、シンポジウム等で協力してきた[2)]。また研究会も開催してきた。

狩野文庫と狩野亨吉に関しては、曽根原理[3)]の要領を得た紹介がある。それによれば、明治の思想家・教育者として知られた狩野亨吉（1865-1942）は、秋田県大館の士族出身で、東京帝国大学に入学、理学と文学の２つの学士を習得して卒業、旧制高校教授を経て、旧制第一高等学校校長、京都帝国大学文科大学学長を歴任した。その京大で、幸田露伴と内藤湖南を教授とする採用人事に関して学内の軋轢により辞職することになった。その後市井の人となった狩野亨吉が知人の負債を引き受けて借財をかかえた折、多年にわたり蒐集してきた彼の蔵書を売り払わなければならなくなり、親友であった東北帝国大学総長の澤柳政太郎（1865-1927）が間にたって東北帝国大学へ売却することになったという。まず大

*東京都江戸東京博物館都市歴史研究室長

正元年（1912）10月に、約７万冊が東北帝国大学図書館に納めら、その代価は10万円と見積もられたところ、狩野亨吉は金額を三分の一でよいとし、その代わり大学は一括かつ永久保管をするという条件を付けたという。

さて狩野亨吉が東北大学へ寄贈した旧蔵書は、108,000冊に及ぶ和漢古典籍類で、哲学をはじめ美術、兵学などあらゆる分野に及ぶコレクションとして世界にも知られた資料群である。東北大学の狩野文庫画像データベースは、狩野文庫中のマイクロフィルム化した和書稀覯本は5,500冊に上るという。

１．東北大学附属図書館狩野亨吉文庫の「大江戸絵馬集」

東北大学との共同研究の過程で、狩野亨吉文庫の調査のため当館研究室スタッフとともに何度か閲覧を許され、貴重な典籍類を手にとることができたが、その中で江戸の地誌や文物の編纂者として知られた斎藤月岑の名前のある和本一冊が関心を惹いた。平成18年９月に当館５階で企画展「浅草今昔展」を開催することになり、その折浅草寺から大絵馬の二代歌川国輝画「陣幕土俵入り図」と二代猿若勘三郎が寛文４年に寄進した「狂言人形絵馬」を借用し、展示することになった。

こうした経緯のなかで、浅草寺絵馬の調査をしていた私は、狩野文庫の斎藤月岑の「大江戸絵馬集」の存在が気になっており、東北大学附属図書館へ詳細な調査及び作品撮影を申請し、許可され、2008年８月８日に撮影した。

この時の画像データは、当館の企画展「浅草今昔展」で、浅草寺大絵馬の一つ猿若勘三郎奉納の「狂言人形絵馬」の展示と一所に写真パネルとして展示された。

さて本稿では、月岑の序文のある「大江戸絵馬集」の全文翻刻と分析、またその原図である斎藤月岑の「武江扁額縮図」および山内天真の模写本「武江扁額縮図」などとの比較調査を試みた。

東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の資料名は「大江戸絵馬集」、附属図書館では「斎藤月岑編並画」とされている。資料番号は、「狩野文庫・５・16378・１」である。この狩野文庫本の月岑編「大江戸絵馬集」を、カラー図版として口絵（[口絵５]～[口絵19]）に掲載し、また翻刻分析を試み、その結果を《資料１》として次に掲げた。

原本に当たる自筆本の「武江扁額縮図」と区別するために、各図について【狩野本１】のように表記した。また摸写図（縮図）の部分は（　　）内に表記し、画題を記し、また款記・署名・印章などの文字資料を「　」を付して表した。なお翻刻に際し、適宜句読点を付した。

《資料１》東北大学附属図書館狩野亨吉文庫所蔵「大江戸絵馬集」

【表紙】

（長方重郭墨摺版題簽）大江戸繪馬集（墨書）

（ラベル）「狩／第５門／16378／１冊」

【表紙裏】

（朱文方印）「東北帝國大學圖書印」

【内表紙】

大江戸繪馬集　全

（朱文重郭長方印）「狩野氏圖書記」

【序文】

（朱文重郭長方印）「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文學博士／狩野亨吉氏舊藏書」

凡名筆の額ハ京師に多し。しかれとも年月を歴て、雲霧に湿り、香烟に薫りて、名画の筆痕失ハん事をなけき、文政の頃、洛の画匠北川春成・合川佽(珉) 和志を合て、洛外神祠梵宇に掲る所の扁額を摹写し、梓に鏤めて扁額規範と目す。尚續編をあらはし、春成圖を写し、画人速水春暁齋其説を附せり。これも又、上木して世に行へり。元禄の頃にや有けん。額の評判と題し、其圖と考と付せる書、上木せるを見たり。近頃求れとも得す。亦、天保の始、藤彦といへる人、厳島宝前の扁額を写し、厳島扁額縮本と題して梓行せり。おのれも江府の神祠佛刹にかくる所の扁額を摸して、梓にちりはめんとの志ハあれと、拙き筆の迨ふへきにあらす。画匠を倩ふて写さしまんにハ、發兌の期近きにあらされハ、其目録を誌して摺物とハなしつ。然るに劇職の餘暇、神佛に賽しけるハ、[4] 巧拙をえらはす、次第に摹し置たるもあれと、拙くして人に見すへきにもあらす。されハとて、弃るも惜しけれハ、浄書して、睡餘操觚のしりへに加へつ、依稀たる疎影といへとも、同好の輩消日の一端ともなるへくやとて、かくハものしつ。

江戸にハ古き額なし。ひとり浅草寺の繪馬のみ古し。其他、漸古[5]四五十年の昔に出す。それさへ雨露にいたミ、火災にうせ、又ハ近頃の地震ニ破壊し、又堂社修理の時おろしたるまゝ、再ひかゝくる事なきもあり。をしむべし。

繪馬ハ珎らしからす。よつてこゝにハ一二を挙く。凡扁額ハ、軸物屏風の類と等しからす。筆勢を専らにして微細をこのます。浅草の鵺退治、清水堂の景清の如き、尤よろしと見ゆ。浅草の韓信等琳、亀戸のけはや・野見宿祢の如、俗中の俗なるものハ、これをうつさす。

此摹本の人物の手足の大小長短骨格肉合等の整はさるハ、矢たての筆にて[6]仮そめに縮図して下画をなすこと疎畧なるかゆゑに、他日繕写すへし。

文久二年戊孟冬　　月岑識

【狩野図１：浅草寺・「繋馬図」（浅草寺古絵馬）】

古繪馬。

竪五尺程。横六尺程。

（繋馬図）

【狩野図２：三圍社額堂・崔嶺画「草摺引図」扁額】

三圍社額堂所掛。

此圖ハまのあたりに見而模写したるにハあらす。

暗記によりてかり［(そ脱ヵ)　］めに図したる所なり。

（朝比奈の草摺引図「崔嶺」）

【図３：護国寺鎮守今宮明神拝殿・素人斎伯喬画「布袋・大黒の相撲図」扁額】

護國寺鎮守今宮明神拜殿ノ額。

按ニ、品川大龍寺ニ呉道士筆ノ観世音ヲ摹シテ碑ヲ建シ人ノ筆ナルヘシ。

（布袋・大黒の相撲図「素人齋伯喬」「寛延元稔戊辰九月」）

【狩野図４：王子稲荷額堂・沖一峨画「黄石公張良図」扁額】

王子稲荷額堂ニ掲ル。天保中納。沖一峨図。

（黄石公張良図「一峨畫」「富田屋甚助拜」）

【狩野図５：御蔵前八幡宮・淡島椿岳画「茨木童子図」扁額】（＊図が表・裏に頁を超えて分離）

御藏前八幡宮所掛。壬戌初冬写之。

（茨木童子図「金地」「淡島椿岳」「〔印〕椿岳」）

馬喰町なる軽焼屋のあるし淡島屋の何某号椿岳の筆なり。

【狩野図６：浅草寺観音堂・鈴木芙蓉画「豫譲図」扁額】

淺草寺観音堂額。

今なし。

鈴木芙蓉筆なり。これも前の図に同しく暗記をもて画く所なれハ真写にあらす。

（豫譲図「金地」）

【狩野図７：湯島天満宮・長谷川雪旦画「源三位頼政図ヵ」扁額】

湯島天満宮。文久三年ノ災後ナシ。

（源三位頼政図ヵ「長谷川法橋雪旦」「田中敏徳敬白」）

【狩野図８：神田明神社額堂・鍬形蕙斎画「稲穂に蜻蛉図」扁額】

神田社額堂。

文政の始奉納。

幅一間計。木地。

将門裂（キレ）ト云フ、古繍模様ナルヨシ。

上ノ一側ハ葉緑青。穂白ロク。

下ノ一側ハ黄土具。タイシヤ書入。実穂黄土。

（稲穂に蜻蛉図「蕙齋筆」）

【狩野図９：高田感通寺毘沙門堂扁額・高直房画「狂言福の神図」】

高田感通寺毗沙門堂所掲。狂言福の神。

文久三亥十月十五日摹。

（狂言福の神図「安永丙申年九月吉辰」「三枝氏守雄」「高直房」）

【狩野図10：芝増上寺芙蓉洲辨財天祠・荒木寛一画「猩猩講図ヵ」】

芝増上寺境内芙蓉洲辨財天祠所掛。横一間餘。壬戌十一月十日摹之。

（猩猩講図ヵ「地金」「寛一」）

【狩野図11：浅草寺観音堂・猿若勘三郎奉納「狂言人形」絵馬】

右浅草寺観音堂所掛。木偶なり。文久二戌年摹。

（「木地」「奉懸御寶」「甲辰寛文四歳六月吉日」「さるわかかん三郎」）

【狩野図12：牛御前社・佐竹永海画「雪中常盤御前図」扁額】
牛御前社。佐竹永海図。
安政六己未春開帳の時江戸中の料理屋より捧る所なり。開帳中参詣写之。
或人云應擧の図に據りて画く所と。
（雪中常盤御前図「地金」「法眼永海繪」）
【狩野図13：柳島妙見堂・嵩濤画「元禄踊り図」扁額】
柳島妙見堂。
（元禄踊り図「地金」「嵩濤筆」「願主濵野屋喜十郎」）
【狩野図14：西新井大師堂・酒井抱一画「洋犬図」扁額】
西新井大師堂額。横壱間餘。嘉永五年縮図。
（洋犬図「抱一揮真筆」「〔印〕文詮」「文化十一年甲戌三月吉祥日」「願主八百屋善四郎」）

この狩野文庫本「大江戸絵馬集」には、序文に荒井泰治氏の寄付金により狩野亨吉氏の旧蔵品を求めたことを彫りつけた印章が押される。この荒井泰治（1861-1927）とは、仙台市出身で、中江兆民の塾で学び、新聞記者、日本銀行総裁秘書から鐘ヶ淵紡績や富士紡績の支配人、台湾商工銀行頭取を務め、明治44年（1911）に貴族院議員となり、明治・大正期に活躍した実業家である。そして東北大学附属図書館狩野文庫の購入資金の寄付者である。

狩野文庫本「大江戸絵馬集」では、全14図が摸写されており、その摸写扁額図に淡彩の色が付けられている。しかし「地金」の指定が見られる以外は、自筆本「武江扁額縮圖」のような色指定はない。また【狩野図５】の御蔵前八幡宮の淡島椿月画「茨木童子図」扁額の縮図は、頁の裏・表に図が二分割されている。

２．斎藤月岑

斎藤月岑は、江戸の町名主として旺盛な文化活動をした町人としてよく知られた存在である。月岑は、文化元年（1804）に江戸で生まれ、明治11年（1878）３月６日に亡くなった。名を幸成といい、のち九代目斎藤市左衛門を襲名した。この斎藤家は、徳川家康の江戸入府以前からの草分名主で、神田雉子町の代々町名主であった。その祖父・幸雄（長秋）、父・幸孝（莞斎）から引き継いだ江戸の地誌編纂事業は、天保期に長谷川雪旦の詳細な挿絵を伴って『江戸名所図会』全20巻として刊行された。また日々の日記『斎藤月岑日記』（東京史料編纂所所蔵、大日本古記録、岩波書店刊）、江戸の年表編纂は『武江年表』（自筆草稿・自筆稿本、東京都江戸東京博物館所蔵）、江戸の町触集である『類聚撰要』（自筆本：国会図書館・早稲田大学図書館、江戸東京博物館写本：月岑の息子・普勝伊兵衛と名主木村定次郎が書き写したもの。第１巻には天保２年（1831）12月付けの凡例がある）、江戸の歌舞音曲に関する編纂物『声曲類纂』、江戸の年中行事を編纂した『東都歳事記』などがある。

斎藤月岑とは、江戸の重要な情報を記録し、考証し、編集し、刊行した人物として、江戸学の研究に

重要なデータを提供してくれた人物である。

３．斎藤月岑の「武江扁額縮圖」

斎藤月岑の「武江扁額縮圖」の原本は、『稀書複製會叢書』第46巻の解題によれば[7]、かつて安田善次郎の所蔵（松廼舎文庫）であったという。月岑の自筆本「松濤軒雜纂」全六巻は、未定稿で一巻から四巻の四冊は松廼舎文庫、五・六巻は東京帝国大学附属図書館と、それぞれ分蔵されていたという。「武江扁額縮圖」は、この松廼舎文庫架蔵の「松濤軒雜纂」第二巻に収められていたもので、残念ながら原本は不明である。おそらく両国にあった安田善次郎邸が大正12年（1923）の関東大震災で焼失した折に、この「武江扁額縮圖」を含む松廼舎文庫も焼失したものと思われる。

この松廼舎文庫本の月岑自筆本「武江扁額縮圖」は、大正８年（1919）12月28日に栄山堂からコロタイプ印刷による『稀書複製会叢書』の第18回配本分として『武江扁額集』と改題されて出版された。これは和綴じ本である。そして平成３年には『稀書複製会叢書』が洋装本化した『新編稀書複製会叢書』第46巻の中に所収されている。栄山堂版『稀書複製会叢書』は、国会図書館にも所蔵されており（請求番号15/387）、ウェブサイトの国会図書館近代デジタルライブラリーでも閲覧できる。

一方で、この貴重な月岑の「武江扁額縮圖」の模写を試みた人がいる。それは山内天真である。天真は、明治33年（1900）に月岑自筆本を模写し「武江扁額縮圖」を著した。この模写本は、国会図書館に架蔵されており（請求番号721/18）、その内表紙には「明治44.5.23購求」のスタンプが捺されていることから、明治44年（1911）に国会図書館の前身である帝国図書館へ入ったことが知れる。

さて、狩野文庫本「大江戸絵馬集」の原図となった斎藤月岑自筆本（松廼舎文庫旧蔵）「武江扁額縮圖」の翻刻分析を試みた。その結果を《資料２》として次に掲げた。

翻刻に際して用いた資料は、以下の通りである。

①国会図書館所蔵『武江扁額縮圖』（15/387）

国会図書館架蔵本は、『稀書複製会叢書』の『武江扁額集（武江扁額縮圖）』（大正８年、栄山堂刊）の複写写真マイクロフィルムのプリントを使用。国会図書館近代デジタルライブラリーにもあるが不鮮明なため。その原本は安田善次郎旧蔵（松廼舎文庫）の斎藤月岑自筆本「松濤軒雜纂」第二巻所収の「武江扁額縮圖」である。松廼舎本から複写コロタイプ印刷し『武江扁額集』と題して刊行した複製本である。

②『新編稀書複製會叢書』第46巻所収の『武江扁額集（武江扁額縮圖）』（平成３年、臨川書店刊）これは栄山堂版『武江扁額集』を複写し、洋本化した『新編稀書複製會叢書』第四十六巻に『武江扁額集』として所収。

③比較のために、国会図書館架蔵の山内天真模写本「武江扁額縮圖」（721/18）を参照した。

なお、資料の月岑の模写した扁額縮図には、月岑の色差しの指示が書き込まれている（例、地金、砂子、緑青、緑、白ロク、紺、朱など）が、煩雑となるので本稿では省略した。なお翻刻に際し、適宜句読点を付し、また版本名は『　』で括った。

《資料２》松廼舎文庫旧蔵　斎藤月岑自筆本「武江扁額縮圖」

【表紙】

（題簽）「武江扁額集」

【内表紙】[8]

武江扁額縮圖

【序文】

凡名筆の額ハ京師に多し。しかれとも年月を歴て、雲霧に湿り香烟に薫りて名画の筆跟（コン）（痕）失ん事をなけき、文政の頃、洛の畫匠北川春成・合川珉和志を合て洛外神祠梵宇に掲（カヽグ）る所の扁額を摹写し、梓に鏤めて『扁額規範』と目す。尚續編をあらはし、春成圖を写し、画人速水（ハヤミ）春暁斎其説を附せり。これも又、上木して世に行へり。元禄の頃にや有けん。額の評判と題し、其圖と考と付せる書、上木せるを見たり。近頃求れとも得す。亦、天保の始、藤彦といへる人、厳島宝前の扁額を写し、『厳島扁額縮本』と題して梓行せり。おのれも江府の神祠仏刹にかゝくる所の扁額を模して、梓にちりはめんとの志ハあれと、拙き筆の迨ふへきにあらす。画匠を請ふて写さしめんにハ、發兌の期近きにあらされは、其目録を誌して摺物とハなしつ。然るに劇職の餘暇、神仏に賽しける日、巧拙をえらばす、次第に摹し置たるもあれと、拙くして人に見すへきにもあらす。されはとて、弃るも惜しけれは、浄書して睡餘操觚のしりへに加（クワ）へつ、依稀たる疎影といへとも、同好の輩消日の一端ともなるへくやとて、かくはものしつ。

江戸にハ古き額なし。ひとり浅草寺の絵馬□□（のミ）古し。其他、漸百四五十年の昔に出ず。それさへ雨露にいたみ、火災にうせ、又ハ近頃の地震に破壊し、又ハ堂社修理の時おろしたるまゝふたゝひかゝくる事なきもあり。をしむへし。

絵馬ハ珎らしからす。よつてこゝにハ一二を挙く。凡扁額は、軸物屏風の類と等しからす。筆勢を専らにして微細をこのます。浅草の鵺退治、清水堂の景清の如き、尤よろしと見ゆ。浅草の韓信等琳、亀戸のけはや・野見宿祢（北溪）の如、俗中の俗なるものは、これをうつさず。

此摹本の人物の手足の大小長短骨格肉合等の整はさるハ、矢立の筆をもて仮そめに縮図して下画をなすこと疎畧なるか故也。他日善写すへし。

文久二年戊孟冬　　月岑識

【図１：浅草寺観音堂・伝古法眼画「繋馬図」絵馬】

浅艸寺観音堂の内、不動尊の上に掲る。江戸第一の古絵馬也。

馬墨、蹄藍、縄同。

背より爪先迄四尺六寸、

面長壱尺八寸五分、

口廻り藍、

耳際より尾筒迄七尺二寸五分、

右『桂林漫禄』所載。

（縮図「寛永十九年壬午二月十九日、炎焼之時」「所堤筆」）

『桂林漫禄』の図を以、再縮圖す。

『桂林漫禄』云。森島氏中良編。武州豊島郡金龍山浅草寺の繪馬ハ、東都第一の旧物なり。寛政元年、本堂修復の時、画工狩野何（△）某これを影写す。木性既に尽て手をさゆれハ、凹かになる程の古物にして、凡六七百年余の星霜を歴たるとハ見ゆるとなり。香の煙に墨ミわたり、日中にも鮮にハ見え難し。只牽縄と鼻革のミ髣髴（ホノカに）見ゆ。落款の文字さだかならす。世に古法眼の製する所也と云はハ非也。寛永壬午歳回禄の時、木村市郎兵衛なる者持退たる事を、画馬の左右二行に記せり。

《頭注》△狩野洞琳写せしよし、『浅草寺志』にしるしたまへり。

寛永十九壬年二月十九日炎焼之時、

武州江戸之住木村市兵衛出之。

俗に云。此馬夜毎ヶ出て近辺の作毛を荒しける故、土民等これを患へ、左（ゝ）甚五郎と云、左ハ飛彈（ママ）の誤なるへしと或木匠はいへり。名誉の彫工にたのミけれハ、甚五郎いと易き事なりとて、乃曳縄を書添けり。夫より其事止にきと、『江戸砂子』なと云書にも載たり。曳縄ハ後に加へたるに非る事、圖を見て知るへし。下畧。

冠山老公の『浅草寺誌』云。按に、加賀美・瀬名両氏の説にてハ、狩野尚信の筆に相違なしといへる事非なり。主馬尚信ハ、寛永十四年丁丑の生にて、廿四才にして慶安三年庚寅四月七日卒したれハ、寛永十九年、本堂類焼の時ハ僅に六才也。いにしへより小児に書画をよくするものあれと、馬の骨相を習得んとまてハ、小児の志にはあるましき事也。いはんやこの絵馬、寛永十九年より以前に奉納したらハ、その節は尚信いまだ二才か四五才なるへし。これにて、その説の謬をしるへし。

其餘『浅艸寺志』にくわしくしるし給へり。こゝに畧す。

【図２：浅草寺観音堂・高嵩谷画「源三位頼政の鵺退治図」扁額】

浅草寺観音堂所掛。

石塚豊芥の話に、北尾蕙斎此額を見て、頼政の右乃手少し短きよし嵩谷に告けれハ、よく見出したりとて、うべなはれけるよし。

嘉永五年子秋写之

嚮に文鳳堂が弃蔵せる、細井氏の編る『文車』といへる随筆を見たりしが、此額の評判を載たり。惜ひ哉、うつさずしてかへしたり。他日ふたゝひ借得てしるし加ふへし。

（縮図「天明七丁未夏五月穀旦」「屠龍翁高嵩谷藤原一雄敬画」）

【図３：浅草寺観音堂・高嵩渓画「猩猩舞図」扁額】

右ニ同。嘉永五子年縮圖。

（縮図「享和三年癸亥七月穀旦」「高嵩渓藤原信宜図」）

「〔印〕藤原信宜」「〔印〕睡雲子」

【図４：浅草寺観音堂・無款「孔雀図」扁額】

浅草寺観音堂所掛。落款なし。見事にてありしが、惜むへし。今ハ見へず。

（縮図）

近き頃、孤村の画に孔雀に牡丹の額あり。これと混すへからす。

【図５：浅草寺観音堂・「御幣白馬の曳馬図」扁額[9]】

浅草寺観音堂。

（縮図「従五位下……」）

【図６：浅草寺観音堂正面・菊地容斎画「堀川夜討御厩喜三太図」扁額】

浅艸寺観音堂正面所掲。

御厩喜三太之圖。菊地容斎翁筆。嘉永五子年縮図。

小山新兵衛ハ佐久間町の米商人也。其家今絶たるよし也。

（縮図「嘉永初元季秋図為／小山新兵衛／容齋逸士」）

【図７：浅草寺観音堂・猿若勘三郎奉納「狂言人形」絵馬】

（縮図「奉懸御寶前」「甲寛文四歳」「辰六月吉日」「さるわかかん三良」）

金文字。

右浅草寺観音堂所掛。木偶なり。文久二戌年摹。

【図８：浅草寺観音堂・岸良画「楊杳図」扁額】

同。

岸良が父岸駒、虎を画て名あり。岸良も虎をゑがゝんとて、この楊杳の図をまうけしなるべし。但し江戸へ来りて此圖を画きたり。

天保十四卯年納之。嘉永五子年縮圖。

（縮図「雅樂助岸良」）

【図９：浅草寺観音堂・北嶺画「豫讓図」扁額】

同。豫讓圖。天保十三寅年納。文久二戌年縮圖。

（縮図「箱舘 北嶺 江貫謹筆」）

【図10】浅草寺観音堂・長雲斎龍淵画「雪中常盤御前図」扁額】

同。

（縮図「弘化四丁未仲夏写／長雲斎龍淵」）

龍淵ハ浮世絵師にて始［　　］といひし人也。嘉永五子年縮圖。

【図11：牛御前社・佐竹永海画「雪中常盤御前図」扁額】

牛御前社。佐竹永海圖。

（縮図「法眼永海繪」）

朱章白字「〔印〕源周村印」

安政六己未春開帳の時、江戸中の料理屋より捧る所なり。開帳中参詣写之。

或人云。應挙の圖に拠りて画く所と。

【図12：三圍稲荷社拜殿・高嵩谷画「牛若弁慶図」扁額】

三圍稲荷社拜殿。

（縮図「樂只齋高嵩谷筆」）

【図13：三圍稲荷社額堂・山口素絢画「大原女図」扁額】

三圍稲荷祠額堂。地金。山斎素絢（ケン）筆にて見事なり。素絢、字ハ伯陵、俗稱山口武次郎、京師ノ人ナリ。

（縮図「平安 素絢」「〔印〕山口劦二」、「高就」）

上田暁菴子云。オハラメハ脚絆ノハキヤウニ差別アリ。向ニテ合タルハ［　　］也。後ニテ合ヌルハ［　　］也トゾ。

嘉永五子年縮圖之。

【図14：神田明神社額堂・鍬形蕙斎画「江戸名所一覧図」扁額】

桐、木地。

（縮図「蕙齋筆」「〔印〕紹眞」）

神田明神社額堂所掲。江戸名所一覧圖扁額。竪六尺餘。横弐間。桐板。

江戸一覧圖ハ、黄華山か画きて梓に上せし『花洛一覧圖』に倣ひて、文化中、蕙斎鍬形紹真始て江戸一覧圖をあらはし、梓に上せて公布し、續て銅板の再圖横六寸計有を鐫せしめたり。其後文政の始、神田社額堂建立の頃、左の圖を画て掲る所にして、左に縮圖せる如きの物にあらす。神祠仏宇大方洩るゝ事なく、市店賣買のさま、大路の交加駢闐のさまにわたる迠、其地の趣をあらはし、上野・隅田川には櫻をゑかき、瀧の川にハ紅葉を画けり。兩國橋畔納涼の躰、其餘四時の景致をもうつしなせり。頗一奇観といふへし。惜哉、三十餘年の星霜を歴て分明なからさるもの多し。

神田社額堂所掛。河津・股野相撲の圖。谷文晁筆。

此圖ハ雀（鶴）か岡若宮八幡宮の宝前に懸る所の圖を、そのまゝにうつされし也。

但し雀か岡に掲る所ハ、寛永年中也。

願主上州屋藤八は、三河町三丁目裏町の□□屋にて、文政中額堂新建の時（翌年）、さゝげたるなり。

【図15：神田明神社額堂・谷文晁画「河津・股野相撲図」扁額】

竪五尺餘、幅弐尺餘。地金、下帯胡粉。嘉永五子年縮圖之。

（縮図「文晁筆」「〔印〕文晁」「文政四年辛巳九月穀且」「上州屋藤八敬具」）

按るに、寛永中、鎌倉鶴か岡若宮八幡の社へ、かくる所のうつし也。

【図16：王子稲荷祠額堂・「蛇図」扁額】

王子稲荷祠。額堂に在。

（縮図）

土佐家の画人の筆と云。落款なし。剥落して分明ならすといへとも、画人は是を賞誉せり。

【図17：柳島妙見堂・嵩濤[10]画「元禄踊り図」扁額】

柳島妙見堂。嘉永五子年縮圖。

（縮図「嵩濤筆」「〔印〕米□」「願主濵野屋喜十郎」）

【図18：屏風坂下稲荷社・酒井抱一・鶯蒲・抱和・孤村画「花卉図」扁額】

屏風坂下稲荷社。地金彩色。文政の頃納之所也。嘉永五子年縮圖。

（縮図「抱一揮真」「□□（鵠ヵ）獅現鶯蒲筆」「抱和筆」「孤村筆」）

【図19：王子稲荷額堂・柴田是真画「茨木図」扁額】

王子稲荷額堂。柴田是真筆。天保申（未）掲之。嘉永五子年三月写之。

綱か伯母。[11)]

（縮図「是真」）

【図20：堀之内妙法寺額堂・橘嵩暁画「清正公韓人ヲ捕フル図」扁額】

堀の内妙法寺額堂。清正公韓人ヲ捕フル圖ナリ。

羊遊斎ハ神田鍛冶町一丁目住、蒔絵師の高手也。

（縮図「旭雄斎橘嵩暁満喜圖之」「〔印〕旭雄斎印」「寛政五癸丑歳十月十有二日」「願主羊遊斎／原久米次郎／更山〔花押〕」）

嘉永五子年写之。

【図21：赤羽水天宮・大西椿年画「草子洗小町図」扁額】

赤羽水天宮。文政天保中奉納。絹地。嘉永五子年写之。

（縮図「椿年」）

【図22：上野清水堂・藤原尚徳画「景清図」扁額】

上野清水堂額。景清図。

近キ頃開帳ノ時、着色ヲ改メテ古色ヲ失ヒ、筆力ヲ損セリ。

（縮図「奉掛御寳前」「雪仙齋藤尚徳圖於弘文堂」「〔印〕雪仙」「〔印〕尚徳」「宝暦七年丑二月」）

嘉永五子年写之。

【図23：富岡八幡宮額堂・南岳源巌画「韓信股潜図」扁額】

冨か岡八幡宮額堂。

卯年の地震に額堂潰れしか、此額ハ幸に全して別當所にこれあるよし。

寛政享和ノ頃。横九尺餘ありしと覚えたり。

嘉永五子年縮圖之。

（縮図「平安 南岳源巌筆」「〔印〕原巌之印」）

【図24：目黒瀧泉寺弁天祠・「猿回し図」扁額】

目黒瀧泉寺弁天祠所掛。嘉永［　　］年写之。

年号并画人ノ不書入。

（縮図）

【図25：西新井大師堂・酒井抱一画「洋犬図」扁額】

西新井大師堂額。地金箔。横壱間餘。嘉永五年縮圖。

（縮図「抱一揮真筆」「〔印〕文詮」「文化十一年甲戌三月吉祥日」「願主八百屋善四郎」）

【図26：京極家屋敷内金毘羅権現社手水屋・英一珪画「草摺引図」扁額[12)]】

京極侯、金毗羅権現社手水屋に所掛。

今なし。幅三尺余。

（縮図「英一珪筆」）

【図27：雑司谷鷺明神社・梅絲来画「牛若弁慶図」扁額】

雑司谷鷺明神社所掛。

ヘリナシ。

（縮図「梅絲来圖」「願成就」「延享四丁卯年三月」「灵（霊）巖島南新堀／笹部氏娘」）」

嘉永五子年縮圖之。

【図28：雑司谷鬼子母神境内稲荷社・「中村吉兵衛芝居図」扁額】

雑司谷稲荷社。鬼子母神境内。横四尺餘。嘉永五子初冬縮圖。

（縮図「諸願成就皆令満足」「正德六歳丙申二月吉日」「□(繪カ)師［　　］」「中村吉兵衛」）

俳優中村吉兵衛、渾名(アダナ)二朱判カ納タル処ナリ。今ヲ去ル事百［　　］年ノ昔ナレト、其質朴ヲ(オ)モフヘシ。

彩色剥落シタルトロ(コ)ロ多シ。

繪師ノ名剥落シタレト鳥居某ナルヘシ。

此額近キコロ迠稲荷社ニ掛テアリシカ、万延中普請ノ後見ヘス。

【図29：雑司谷鷺明神社・英一蜂画「趙雲図」扁額】

雑司谷鷺明神社に掛る所。趙雲図。

（縮図「享保十九［　　］年二月穀旦」「三河町河岸一丁目／願主美濃屋清四郎」「英一蜂敬書」）

此圖筆太に画きてすこやかの出来也。彩色大かた落剥せり。

文久二年十月十三日参詣してこれを摹す。

【図30：護國寺鎭守今宮明神拝殿・素人斎伯喬画「布袋・大黒の相撲図」扁額】

同日模。

護國寺鎭守今宮明神拝殿ノ額。

按ニ、品川大竜寺ニ呉道子カ筆ノ観世音ヲ摹シタ碑ヲ建シ人ノ筆ナルヘシ。

（縮図「素人斎伯喬」「寛延元稔戊辰九月」）

【図31：神田明神社額堂・鍬形蕙斎画「稲穂に蜻蛉図」扁額】

神田社額堂。文政ノ始奉納。幅一間計。木地。

将門裂(キ)レト云、古繍ノモヤウナルヨシ。

上ノ一側ハ葉緑青、実(穂)白ロク。

下ノ一側ハ黄土具、タイシヤ書入、実(穂)黄土。

（縮図「蕙斎筆」）

【図32：神田明神社額堂・雪仙画「繋馬図」絵馬】

同社額堂。

（縮図「文政五壬子歳五月吉祥日」「雪仙筆」）

竪六尺余。幅九尺計。

文久二年戊［　　］冬写之。

【図33：神田明神社額堂・「御備餅図」扁額】

神田社額堂。幅三尺。其餘三十五所へ納タルハ是ヨリチイサシ。

○神田大こく社○妻恋○ゆしま 安政二○柳しま○御蔵前八まん宮[13] 万延元○傳通院大こく社 万延元○真崎○清水堂○トラ門。

（縮図「文久二壬戌年」「額三十六面之内」「西神田錺半」[14]）
フチ真鍮メツキ。

皆川町弐丁目
民作店　八十弐才
錺職　半次郎

御備付候額面奉納御尋ニ付左ニ申上候。 私儀、幼少之砌久々病心ニ而醫師相頼薬用致候得共、墓々敷全快も致不申候ニ付、乍臥居所々ニて神佛江祈念致、其御蔭ニや追々宜敷、少々宛も食事進ミ、無程全快致候茂、全信心致候印故か。右為御禮神仏之御命、日々供物備拜し罷在候処、去ル弘化四午年十月中、父半次郎病死仕候ニ付、父名ニ改、家督相續仕、其砌より職分世話敷、日々家業ニ追れ、右相願候神仏江モ御禮拜モ怠り、供物備候茂、自由ニ難相成、無益ニ月日ヲ送り罷在候。其後ハ以前と替無病ニ相暮候ニ付而茂、先々病心之事思ひ出し、不相済と存候得共、何分職業ニ追れ候故、心通を額面ニ致し、永代供物御備を奉納致度と年来心掛、當時迨都合三拾ヶ所へ奉納仕来候。右御尋ニ付此段申上候。

文久二戌年十二月

【図34：湯島天満宮・鳥山石燕画「草摺曳図」扁額】
湯島天満宮。
（縮図「鳥山石燕豊房画」）
天明ノ頃也。文久癸亥ノ災ニ罹リ今ナシ。

【図35：本郷真光寺天満宮・泉守一画「騎馬図」扁額】
（縮図「寿香辛（斎ヵ）藤原守一」〔印〕〔花押〕「奉納」「享和二壬戌歳三月」）
本郷真光寺天満宮。壬戌写之。

【図36：湯島天満宮・長谷川雪旦画「弁慶・土佐坊図」扁額】
文久癸亥の災に罹り、今ハナシ。
湯島天満宮。弁慶・土佐坊。天保中納る所也。
（縮図「長谷川法眼雪旦宗秀六十五歳畫」）
文久二壬戌冬縮圖之。

【図37：湯島天満宮・長谷川雪旦画「源三位頼政図」扁額】
同社。頼政。文久三ノ災後ナシ。
（縮図「長谷川法眼雪旦」「田中敏徳敬白」）

【図38：浅草寺観音堂・石田半兵衛画「環城楽図」扁額】
浅草観音堂。
（縮図「月香齋石田半兵衛正豊」「福田氏敬白」
文久壬戌［　　］写之。

【図39：柳島法性寺妙見堂・高嵩溪画「勧進帳図」扁額】
柳島法性寺妙見堂。横長ノ小額ナリ。人物丈一尺餘モアルヘシ。

弁慶ヨリ番兵ノ方ニ意味アリ。愚筆ニ写シ得サレハ、ソノ形ノミヲアラハセリ。

（縮図「文化己巳林鐘」「高嵩溪謹圖」）

戊十一月二日[15]冬至謁祠摹之。

【図40：愛宕社額堂・春川秀蝶画「洛陽祇園会山鉾略図」扁額】

愛宕社額堂所掲。細圖にて見事にてありしか、［　　］中［　　］の火災に罹りて今なし。安永と文化の年号ハ粉色をあらためしなり。

（縮図「洛陽祇園會山鉾畧圖」「安永八亥年文化二丑[16]年」「繪師春川秀蝶」「延享四年丁卯五月吉日」「櫻田久保町願主つちや幸助」）

文政中縮図之。

【図41：白金樹木谷覚林寺清正公社・玉山修德画「清正公図」扁額】（＊見開き二頁にわたり、上下に分けて描く）

白金樹木谷覚林寺清正公社所掛。文政七年写。災後今なし。

（縮図「法橋玉山修德謹画」＊旗指物に「加藤主計頭」）

壬戌十一月朔日再摹。

右の上なり。

又此圖を縮したる玉山か筆の画軸へ或人蜀山先生の讃を乞しを看たり。

擒生釜山　帰心法華　称鬼将軍　烈於夜名

南畝覃

【図42：高田水稲荷社・「境内図」扁額】

高田水稲荷社所掛。社にてじようごの如き物へ水を汲入る如く見ゆるハ神水なるへし。社前詣人物をねたるハ竹筒の類にて此水を受るならん。

（縮図「御宝前」「寶永三丙戌年九月」「念仏堂」「いもり池」「弁天」「本社」「神楽堂」「毘沙門」「原図不知何人画。宝永中所掲。今百三十年矣。丹青剥落、筆墨消耗、物象殆不弁。今茲天保八年。龍泉丁。酉仲春。在邦老需、臨摹重掲之。霞舫館儁。當村」）

嘉永五壬子。写之。

【図43：高田水稲荷社・「稲荷社殿図」扁額】

同社所掛。

宝永三年ハ、今文久二年より百五十年の昔なれと、その質朴思ふへし。麁相の額なれと、頗古色にておもしろし。

（縮図「奉掛御寶前」「芝西久保切通／越後屋藤兵衛」「宝永三年戊十月 吉祥日」）

天保中写之。

【図44：神田明神社額堂・玉山修德画「源為朝図」扁額】

神田社額堂所掛。為朝図。

大坂の石田玉山の門人岡田玉山の筆なり[17]。蔀関月か祇園社へ掛[18]たる所の圖ぶ拠る所なるよし聞り。

三河町三丁目家主中奉納。

（縮図「文政庚辰晩春」「法橋玉山修德」）

【図45：藤澤の清浄光寺観音堂・「二股大根を食べる奴図」扁額】

藤澤宿清浄光寺観音堂額。

文政十亥年春、江の島開帳へ参詣の時、當寺へ詣して此圖を摸す。

（縮図「武運長久二世安樂祈所」「元禄元戊辰年十一月吉日」「奉掛御宝前」＊暖簾に「藤屋」）

【図46：湯島天満宮額堂・篁雪画「鳥の見世物図」扁額】

湯島額堂。香爐に薫して分明ならさるをそのまゝうすつ。

文久三亥年[19]ノ災ニカヽリテ今ナシ。

（縮図「篁雪」）

竪一間。横三尺。壬戌年十月二十九日写之。

【図47：浅草寺観音堂・鈴木芙蓉画「豫讓図」扁額】[20]

浅草寺観音堂額。今なし。

鈴木芙蓉筆なり。これも前の圖に同しく暗記をもて画く所なれハ真写にあらす。

（縮図）

【図48：平河天神社・雲臥画「西王母図」扁額】

麹町平河天神社所掲、壬戌十月廿五日参詣摹之。

西王母の圖。筆者雲臥何人にや知らす。浮世絵にして、画風をもて考る計り。北溪か門人にやあらん。

幅一間程。

原図を見しに、容貌狀態いかにもたをやきたるかすかた也。楊貴妃・西施の類ならハ、左もあるへし。

王母ハ仙女也。いかでかくなまめきたる形にハゑかきけんとをかし。

又、かたハらの少田[21]もともになまめきたり。しかもミな和人のかほなり。思ふに神事（オマツリ）の邃物（ネリモノ）にいで在し躍子の西王母なるべし。

（縮図「雲臥筆」）

【図49：大川端細川家中屋敷清正公社額堂・千載画「石橋図」扁額】

大川端細川侯御藩清正公社額堂[22]。壬戌春、新たに勧請あり。

石橋能。

（縮図「千載」）

壬戌十一月写之。

【図50：大川端細川家中屋敷清正公社額堂・柴田是真画「遍照図」扁額】

同社額堂。幅一間。柴田是真筆。

遍照圖。壬戌十月廿四日謁祠摸之。

（縮図「是真」）

【図51：神田明神社額堂・玉亀画「菊慈童図」扁額】

神田社額堂。女筆にしてさせるものにハあらされと、巻末を祝してこの圖をうつし出せり。

ヨコ二尺余。

（縮図「ことふきは七百歳ときく慈童なをいく千代もおハしませかき　遠櫻山人」「玉亀」[23]）
壬戌十月廿八日摹。
【図52：伝通院地中福聚院大黒堂・南川在冨画「三番叟図」扁額】
傳通院地中福寿（聚）院大黒堂。幅三尺余。竪六尺程。壬戌十一月十四日摸之。
（縮図「南川在冨」「吉澤鉄二郎／同虎之助／同岩五郎／同藤吉／同たひ女」）
箋[24]の外に小札あり。天明四甲辰五月奉納。
【図53：芝増上寺芙蓉洲弁才天祠・荒木寛一画「猩々講ヵ」[25]扁額】
芝増上寺境内。壬戌十一月十日摹之。
芙蓉洲弁才天祠所掛。横壱間餘。寛一何人か知らす[26]。按るに狩野氏の画風なり。
（縮図「寛一」）
印面、梅陰斎。
【図54：御蔵前八幡宮・淡島椿岳画「茨木図」扁額】
御蔵前八幡宮所掛。壬戌初冬写之。
（縮図「淡島椿岳」「〔印〕椿岳」）
馬喰町なる軽焼屋のあるし淡島屋何某号椿岳の筆なり。
【図55：浅草寺観音堂・玉山修徳画「笙を吹く武人図？」扁額】
浅艸寺観音堂。文政五六年頃納之。今なし。
（縮図「法橋玉山修徳画」）
【図56：王子稲荷社額堂・沖一峨画「黄石公張良図」扁額】
王寺稲荷社額堂ニ掲ル。天保中納。沖一峨圖。
（縮図「一峨畫」「富田屋甚助拜」）
【図57：三圍稲荷社額堂・崔嶺画「草摺引図」扁額】
三圍社額堂所掛。
此圖ハまのあたりに見て摹したるにハあらす。
暗記によりてかりそめに圖したる所なれは、原圖にくらふれは大なるたかひあるへし。
（縮図「崔嶺」）
【図58：高田感通寺毘沙門堂・高直房画「狂言福の神図」[27]扁額】
高田感通寺毗沙門堂所掲。狂言福の神カ。
（縮図「安永丙申年九月吉辰」「三枝氏守雄」「髙直房」「〔印〕直房」）
文久三亥十月十五日摹。

４．斎藤月岑日記に見る絵馬・扁額調べ

斎藤月岑が、江戸の絵馬や扁額を調査したことは、恐らく斎藤家三代にわたる江戸の地誌編纂のための寺社などの調査の過程で、奉納された扁額にも大きな関心を持ったためと思われる。「武江扁額縮圖」

の序文にあるように、京の『扁額規範（都絵馬鑑）』や厳島神社の『厳島扁額縮本（厳島絵馬鑑）』などに月岑は強い刺激を受けたようである。

月岑は、町名主としての職分を務めるかたわら、精力的に地名・来歴や音曲などについての編纂を進めていたが、筆まめな月岑は日記を残している。その『斎藤月岑日記』（以下『日記』と略称する）の中に、扁額を模写している記事がある。

『日記』の安政六年（1859）三月十日の条に「天気よし。牛御前開ちやうへ参る。寺島村花やしき土手下ニ而曲候角ニ而支度する。久之丞ニ大橋ニ而逢ふ。健蔵来る。島屋喜助来る。今井八三郎又来る。料理茶や、奉納、常盤の顔シヤワウ具ニ而甚タくろし。」（『斎藤月岑日記七』東京大学史料編纂所編）とある。これは、牛御前開帳に出かけた月岑が、奉納扁額で絵師の佐竹永海の描いた「雪中常盤御前図」を見た月岑が、常盤の顔を塗った絵の具に赭黄が使われていて黒みがかった表情となっている、と感想を述べている。

また同年四月八日の条にも「曇ル、後晴。昼前より牛の御前開ちやうへ参る。平岩へよる。永海筆常盤の額うつす。（下略）」とあり、牛御前開帳にて、佐竹永海筆の「雪中常盤御前図」扁額を模写したことが記されている。これも「武江扁額縮圖」にも載る、佐竹永海の扁額である。佐竹永海は、彦根藩御用絵師として活躍した。

万延元年（1860）二月廿三日には、「（中略）〇谷中団子坂上の黒塀の内ニ小キいなり様あり。小キ額出来したり。其一・林斎・是真・素真・広重画、兜の額。社より古やう木刀其外色々小キ額あり。」とあり、谷中の団子坂上の稲荷小祠に小さな扁額が奉納されていて、鈴木其一、岡島林斎、柴田是真、山形素真、歌川広重の描いたものであったという。

さて「大江戸絵馬集」の序文の款記に「文久二年戊孟冬」とある。文久２年（1862）10月のことである。月岑が江戸の絵馬や扁額を模写した縮図をまとめ、その序文を書いた後も、この縮図模写が翌3年まで行われていたことが月岑の縮図の註記でわかる。これは一度まとめた縮図集をその後も補ったこと意味するものであろうか。出版には至らず、目録という文言が序文のなかにあるので、自筆本の「武江扁額縮圖」は未定稿とみるべきと思われる。ちなみに多くの摸写を行った文久2年は、2月11日には皇女和宮と14代徳川家茂との婚儀画執り行われた。また夏にはコレラが流行し、8月4日には天上に彗星が出現した年である。

また「卯年の地震に額堂潰れし」（自筆本【図33】）などの、安政2年（1855）の江戸大地震による被災の情報や、文久3年3月16日の本郷新町屋（大根畠といふ）より出火で湯島天満宮本社拝殿の焼失（『武江年表』）などによる情報も注記されていることがわかる。いかにも斎藤月岑らしい註記である。

さて、月岑がもっとも多く扁額を模写したのが文久２年である。そこで、扁額縮図の摸写（「武江扁額縮圖」および「大江戸絵馬集」）と『斎藤月岑日記』との関係を見てみると、以下の通りである。

『日記』の文久二年十月十三日には、「四つ過より市左衛門、おまち・松之介連、雑司谷へ參詣する。茗荷やニ而支度する。日暮かへる。」とある。この日、市左衛門（月岑）が息子たちを連れて雑司谷鬼子母神へ参詣した。註記などからその折、雑司谷鷺明神社の英一蜂画「趙雲図」（自筆本【図29】）と、中途で恐らく護國寺鎮守今宮明神拝殿の素人斎伯喬画「布袋・大黒の相撲図」（自筆本【図30】【狩野図

3】）を模写したと思われる。

『日記』の同月二十二日には「湯しまへ參る。額うつす。」とあり、文久3年に罹災した湯島天満宮の長谷川雪旦画の二つの扁額「弁慶・土佐坊図」（自筆本【図36】）と「源三位頼政図」（自筆本【図36】【狩野図７】）を模写している。その際に、同じく文久3年に罹災した鳥山石燕画「草摺曳図」（自筆本【図34】）も写した可能性がある。二十四日は「濱町細川侯清正公へ參り、額うつす。」とあり、大川端の細川家中屋敷にあった清正公社額堂の柴田是真画「遍照図」（自筆本【図50】）を写している。二十五日は「朝より平河天滿宮へ參り、夫より團子坂菊卯平次庭見ニ行、同所ニて支度する。」とあり、平河天神社の雲臥「西王母図」（自筆本【図48】）を模写している。二十八日には「湯しま天滿宮・池のはた辯才天・忍岡いなりへ、神田御社へ參る。」とあり、同社額堂の玉亀画「菊慈童図」（自筆本【図51】）を写している。

「武江扁額縮圖」（自筆本【図46】）には、同年十月二十九日に文久3年に罹災した同社額堂の篁雪「鳥の見世物図」を模写したことになっているが、これは二十八日の誤記かもしれない。

『日記』の十一月二日には、「冬至ニ付眞土山へ參る。柳島妙見宮へ參る。暮前かへる。」とあることから、柳島法性寺妙見堂・高嵩溪画「勧進帳図」（自筆本【図39】）を模写しているが、この扁額はそれより前の文政7年（1824）にも月岑が摸写していることが註記でわかる。十一月十日には、「虎の門へ參る。増上寺・芙蓉辯才天迄參る。芝口ちとせそバたべる。」とあり、芝増上寺の芙蓉洲弁才天社にあった荒木寛一画「猩々講ヵ」（自筆本【図53】【狩野図10】）を模写している。十四日には、「晝後村山氏・牛天神・沢藏主社へ參る。傳通院大こく天參る。」とあり、伝通院地中福聚院の大黒堂にある南川在冨画「三番叟図」（自筆本【図52】）を写している。二十四日には、「今村大老母・喜之助、大川はた清正公へ參る。」とあり、大川端の浜町河岸にあった肥後熊本藩細川家中屋敷の清正公社額堂に掲げられた千載画「石橋図」（自筆本【図49】）を模写している。この加藤清正を祀る小祠は大変評判となり一般にも参詣が許されたという。

このように、月岑自ら寺社への参詣記録を『日記』にも残しており、また模写した日付を扁額縮図の註記に書き込んでおり、中には「額うつす」のような直接の行動が『日記』にも記録されいる。

月岑の江戸市中を中心にした、寺社の堂宇や額堂に掲げられた絵馬や扁額の調査の成果は、すでに紹介した「武江扁額縮圖」の58点にも及ぶ縮図からうかがえるが、その自筆本「武江扁額縮圖」とそれを抜粋した狩野文庫本「大江戸絵馬集」の比較一覧図《表１》を作成した。

その自筆本「武江扁額縮圖」によれば、扁額を摸写して縮図とし始めたのは、文政７年（1824）の白金の樹木谷覚林寺にある清正公社の「清正公圖」が紀年では古く、文政期に愛宕社額堂の「洛陽祇園会山鉾略図」、また文政10年（1827）春の藤澤の清浄光寺観音堂の「二股大根を食べる奴図」であり、文政期に珍しい扁額を模写し始めたことが知れる。しかし、もっとも数多く縮図を描いたのは嘉永５年（1852）と文久２年（1862）である。その間に、安政６年の向島の牛御前社の佐竹永海画「雪中常磐御前」を模写したことが『月岑日記』に載ることは先述した通りである。

狩野文庫本「大江戸絵馬集」は、「武江扁額縮圖」の58点の中から14点を抄出して浄写したものと考えられる。「大江戸絵馬集」は、その成立の経緯についての記録がなく、ペン書きのようなタッチで序

文や縮図が描かれているが、月岑の手になるものかは判然としない。月岑の自筆本や稿本が江戸東京博物館にも所蔵されているが、墨筆のものばかりで、筆致を比較するペン書きのものは未見である。筆跡とペン書きでは、なかなか比較が難しいが、よく似ているとはいえないように感じる。

月岑は明治11年（1878）まで生存したので、明治期に入りペン書きで浄写抜粋本を手がけたことも考慮しなければならないが、現在のところ判断は棚上げとせざるを得ない。

このように「大江戸絵馬集」の精選14点は、一覧表を見る限りあまりその選択に基準がないように見

【第１表】　比較表

番号	場所	絵師	画題	奉納年	縮図摸写日	狩野文庫
図１	浅草寺観音堂	伝古法眼（狩野元信）	繋馬図（絵馬）			狩野図１
図２	浅草寺観音堂	高嵩谷	源三位頼政の鵺退治図	天明７（1787）５月	嘉永５（1852）秋	
図３	浅草寺観音堂	高嵩渓	猩猩舞図	享和３（1803）７月	嘉永５（1852）	
図４	浅草寺観音堂	無款	孔雀図			
図５	浅草寺観音堂	従五位下……	御幣白馬の曳馬図			
図６	浅草寺観音堂正面	菊地容斎	堀川夜討御厩喜三太図		嘉永５（1852）	
図７	浅草寺観音堂	無款	狂言人形絵馬			狩野図11
図８	浅草寺観音堂	岸良	楊杏図	天保14（1843）	嘉永５（1852）	
図９	浅草寺観音堂	北嶺	豫譲図	天保13（1842）	文久２（1862）	
図10	浅草寺観音堂	長雲斎龍淵	雪中常盤御前図	弘化４（1847）仲夏	嘉永５（1852）	
図11	牛御前	佐竹永海	雪中常盤御前図	安政６（1859）春	安政６（1859）春	狩野図12
図12	三圍稲荷社拝殿	高嵩谷	牛若弁慶図			
図13	三圍稲荷社額堂	山口素絢	大原女図		嘉永５（1852）	
図14	神田明神社額堂	鍬形蕙斎	江戸名所一覧図			
図15	神田明神社額堂	谷文晁	河津股野相撲図	文政４（1821）９月		
図16	王子稲荷祠額堂	無款	蛇図			
図17	柳島妙見堂		元禄踊り図		嘉永５（1852）	狩野図13
図18	屏風坂下稲荷社	酒井抱一・鶯蒲・抱和・孤村	花卉図		嘉永５（1852）	
図19	王子稲荷額堂	柴田是真	茨木図		嘉永５（1852）３月	
図20	堀之内妙法寺額堂	橘嵩暁	清正公韓人ヲ捕フル図	寛政５（1793）10月12日	嘉永５（1852）	
図21	赤羽水天宮	大西椿年	草子洗小町図		嘉永５（1852）	
図22	上野清水堂	藤原尚徳	景清図	宝暦７（1757）２月	嘉永５（1852）	
図23	富岡八幡宮額堂	南岳源巌	韓信股潜図	寛政享和（179-1804）	嘉永５（1852）	
図24	目黒瀧泉寺弁天祠	無款	猿回し図		嘉永５（1852）?	
図25	西新井大師堂	酒井抱一	洋犬図	文化11（1814）３月	嘉永５（1852）	狩野図14
図26	京極家屋敷内金毘羅権現社手水屋	英一珪	草摺引図			
図27	雑司谷鷺明神社	梅絲来	牛若弁慶図	延享４（1747）３月	嘉永５（1852）	
図28	雑司谷鬼子母神境内稲荷社	不明	中村吉兵衛芝居図	正徳６（1716）２月	嘉永５（1852）初冬	
図29	雑司谷鷺明神社	英一蜂	趙雲図	享保19（1734）２月	文久２（1862）10月13日	
図30	護國寺鎮守今宮明神拝殿	素人斎伯喬	布袋・大黒の相撲図	寛延元（1748）９月	文久２（1862）10月13日	狩野図３
図31	神田明神社額堂	鍬形蕙斎	稲穂に蜻蛉図	文政始（1818-?）		狩野図８
図32	神田明神社額堂	雪仙	繋馬図（絵馬）	文政５（1822）５月	文久２（1862）冬	
図33	神田明神社額堂	不明	御備餅図	文久２（1862）	文久２（1862）12月	
図34	湯島天満宮	鳥山石燕	草摺曳図	天明（1781-89）	＊文久３（1863）罹災	
図35	本郷真光寺天満宮	藤原守一	騎馬図	享和２（1802）３月	文久２（1862）	
図36	湯島天満宮	長谷川雪旦	弁慶・土佐坊図		文久２（1862）冬 ＊文久３（1863）罹災	
図37	湯島天満宮	長谷川雪旦	源三位頼政図		＊文久３（1863）罹災	狩野図７
図38	浅草寺観音堂	石田半兵衛	環城楽図		文久２（1862）	
図39	柳島法性寺妙見堂	高嵩渓	勧進帳図	文化己巳（1809）	文久２（1862）11月２日	
図40	愛宕社額堂	春川秀蝶	洛陽祇園会山鉾略図	安永８（1779）・文化21805）	文政（1818-30）	

番号	場所	絵師	画題	奉納年	縮図摸写日	狩野文庫
図41	白金樹木谷覚林寺清正公社	玉山	清正公図		文政７（1824）年・文久２（1862）11月朔日再摸 ＊文久３（1863）罹災か	
図42	高田水稲荷社	不明	境内図	宝永３（1706）９月・天保８（1837）修復	嘉永５（1852）	
図43	高田水稲荷社	不明	稲荷社殿図	宝永３（1706）10月		
図44	神田明神社額堂	岡田玉山	源為朝図	文政庚辰（1820）晩春		
図45	藤澤清浄光寺観音堂	不明	二股大根を食べる奴図	元禄元（1688）11月	文政10（1827）春	
図46	湯島天満宮額堂	篁雪	鳥の見世物図		文久２（1862）10月29日 ＊文久２（18632）罹災	
図47	浅草寺観音堂	鈴木芙蓉	豫譲図		＊当時すでになし	狩野図６
図48	平河天神社	雲臥	西王母図		文久２（1862）10月25日	
図49	大川端細川家中屋敷清正公社額堂	千載	石橋図		文久２（1862）11月	
図50	大川端細川家中屋敷清正公社額堂	柴田是真	遍照図		文久２（1862）10月24日	
図51	神田明神社額堂	玉亀	菊慈童図		文久２（1862）10月28日	
図52	伝通院地中福聚院大黒堂	南川在冨	三番叟図	天明４（1784）５月	文久２（1862）11月14日	
図53	芝増上寺芙蓉洲弁才天祠	荒木寛一	猩々講ヵ		文久２（1862）11月10日	狩野図10
図54	御蔵前八幡宮	淡島椿岳	茨木図			狩野図５
図55	浅草寺観音堂	岡田玉山	笙を吹く武人図	文政５，６（1822, 3）頃	＊当時すでになし	
図56	王子稲荷社額堂	沖一峨	黄石公張良図	天保（1830-44）		狩野図４
図57	三園稲荷社額堂	雇嶺	草摺引図		＊暗記で描く	狩野図２
図58	高田感通寺毘沙門堂	高直房	狂言福の神図	安永丙申（1776）９月	文久３（1863）10月15日	狩野図９

受けられる。

５．山内天真と「東都繪馬鑑」

この山内天真は、月岑の江戸の絵馬を模写することに大きな感動を覚えたようで、先述したように月岑の「武江扁額縮圖」を模写し、また自身も月岑に見倣って東京にある江戸・東京の扁額・絵馬・衝立を縮図とした「東都繪馬鑑 全」を著している。これも国会図書館に架蔵されている（請求番号：特別文庫せ/89）。序文に「明治卅三年庚戌晩冬　山内生識（朱文丸印「天真」）」とあることから、明治33年（1900）12月に「東都繪馬鑑 全」を浄写したことがわかる。また、序文の下に「大正2. 1. 22購求」と押印されているので、大正２年（1913）に帝国図書館架蔵をなったことがわかる。

山内天真は、明治15年（1882）東京に生まれ、名は金治郎。高橋応身、川端玉章らに師事した。天真会、巽画会の会員である。

さて、この天真の「東都繪馬鑑」を翻刻分析を試み、次に《資料３》として掲げた。他本と区別するために、各図について【東都図１】のように表記した。また縮図の部分は（　　）内に表記し、画題を記し、また款記・署名・印章などの文字資料を「　」を付して表した。なお翻刻に際し、適宜句読点を付した。

《資料３》山内天真編画『東都繪馬鑑』

【表紙】

（墨筆）東都繪馬鑑　全

【序文】（〔印〕大正／2.1.22／購求）

われさきに齋藤月岑ぬしの手寫せる江戸繪馬鑑を見て頗る感あり。そハ廿余年間劇職の余暇ニ綴りしもの、而してそれと額とを對し見るに、其頃奉納せしはかりなる額も、今ハ丹青剥落して、分明ならさるもの多く、或ハ天災ニ罹りて失ハれたるものも少からす。されハ今在るものも、やかてハ雲霧ニ濕り、失せんも計り知へからす。思ふニ余も藝林ニ遊ふもの、いかて其洩れたる、又其以後の奉納額を手寫し、一つハ研究ニ資すへく、疎影といふとも寫しをかハやとて、数年来神祠佛宇に参して摹せるもの、今はた数十圖ニ及ひぬ。よりて壱本となし、東都繪馬鑑とハ名つけつ。

當時ハ繪画展覧會多く、昔時の如く奉納額ハ盛ならねと、さはれ優品も少からす。就中玉章翁狐嫁入、北斎翁悪神降伏及ひ淺草の四睡の如き有名なるものなり。

余は成へく廣く各社の額を摹さんとせし故、中にハさせる名筆ならぬも混せり。日本橋水天宮、深川八幡宮の如き額堂のもうけあれとも、遂ニ摹さん品なきは遺憾なりき。

高きハ三四丈近きも二三間の高さにあるを、矢立の筆にて摹したるなれハ、なかゝゝに其真ハ得かたく、加ふるに生来の鈍筆、見る人寛許ありたし。

明治卌十三年庚戌晩冬　　山内生識「〔朱文丸印〕天真」

【東都図１：深川富岡不動堂額堂・飯島光峨画「井筒図」扁額】

深川富岡不動堂額堂。横九尺計。飯島光峨筆なり。

（縮図「光峨」）

【東都図２：河鍋暁斎画「相撲図」扁額】

（縮図「奉獻」「明治七年三月」「洞郁暁斎画」「湯島三組町地主店中」

【東都図３：神田明神社・河鍋暁斎画「唐獅子図」衝立】

神田明神。衝立なり。墨画。横九尺計。

（縮図「洞郁陳之画」）

【東都図４：亀戸天満宮拝殿・小林永興画「菅公図」扁額】

亀井戸天満宮拝殿在。横四尺程。金地。

（縮図「奉獻」「京橋區越前堀二丁目 遠藤大三郎」「明治三拾壱戊戌年秋 鮮斎永興謹圖」「勝文翁㊞」）[28]

【東都図５：亀戸天満宮拝殿・柴田是真画「松に鷹図」衝立】

同社。衝立なり。横九尺計。地紙金地。

（縮図「嘉永壬子春三月」「柴田是眞寫」）

【東都図６：神田明神社額堂・菊池容斎画「北条早雲図ヵ」扁額】

神田明神社額堂。金地。横五尺計。

（縮図「文久癸亥凌晨」「七十六翁容斎武保」）

【東都図７：神田明神社額堂・小林永濯画「大国主命と因幡の白兎図」扁額】

明神社額堂。

（縮図「鮮斎永濯拝画」）

【東都図８：雑司谷鬼子母神社・観嵩月画「狂言末広がり図」扁額】

鬼子母神在。金地。巾五尺計。

（縮図「觀嵩月図」）

【東都図９：雑司谷鬼子母神社・杉安成候喬画「騎馬合戦図」扁額】

雑司ヶ谷鬼子母神社ニ在。金地。極彩色。

（縮図「為笑改／杉安成候喬画」「寛政八丙辰年四月再興」）

【東都図10：雑司谷鬼子母神社・無款「唐子遊戯図」扁額】

鬼子母神在。板地。無落款。

（縮図「寄進」「文化八年辛未十一月吉日」）

【東都図11：三圍社額堂・長雲斎龍渕画「伊勢物語武蔵野図」扁額[29]】

三圍社額堂。金地。立三尺計。

（縮図「奉納」「安政三丙辰仲夏」「長雲齋法橋龍渕畫」[30]）

【東都図12：三圍稲荷社額堂・川端玉章画「狐嫁入之図」扁額】

向嶋三圍稲荷社額堂に在。

川端玉章翁筆。狐嫁入之圖。板地。横二間計。

三井家より鬼門除として奉納せしよし。

玉章翁壮年の作にして、狐体個々の活動ふりなかゝゝ。愚筆にハ寫しかたかり。當時評判の額にして、翁の出世作とも云ふべきものなり。今や三十余年の星霜を歴て、粉色所を剥落して、分明ならさる所あり。

（縮図「明治五年壬申晩春寫」「玉章」）

【東都図13：三圍稲荷社額堂・川端玉章画「波に隼図」扁額】

同社。

（縮図「玉章」）

【東都図14：三圍稲荷社額堂・川端玉章画「越後屋呉服店元旦の景図」扁額】

三圍稲荷額堂ニ在。板地。横九尺。立五尺計。

駿河町越後屋元旦之圖。

川端玉章翁筆。

越後屋呉服店元旦の景なり。此圖ハ狐嫁入嫁入よりハ数年後の作なり。三井家ハ三圍稲荷ニ信仰深く、此外廣重・文挙氏なとの作あれとも、此圖ニ似通ひ居れハ、われハ畧しつ。

（縮図「玉章繪」）

【東都図15：三圍稲荷社額堂・山田国顕画「綾瀬川山左衛門の土俵入り図」扁額】

（縮図「綾瀬川山左衛門者、浪華之産也。常祈成於三圍社焉」「侍神應顕然、蒙大関之名既壬申冬矣。是神霊之所致歟。」「奉獻 綾瀬川山左衛門／藤達忠／百拜」「曜齋山田国顕寫」「因而摸掲其業體将欲使

人顕此神澤者也」「惟明治六年歳次癸酉五月」[31]

【東都図16：向島牛御前社拝殿・葛飾北斎画「悪神降伏之図」扁額】

向嶋牛御前社拜殿に在。

北斎翁筆。悪神降伏之圖。横九尺余。

金地。極彩色。

翁八十六歳の筆といへハ、弘化一二年頃の作なるへし。用筆の雄健なる、着色の豊灑なる、七十余年の今日、なを鮮に見らるゝにても知らる。誠に翁の妙作ならん。強て云へハ、画所の高からさるを憾とす。かつて某外人数万金を以て此額を所望せし事ありと。

（縮図「前北齋卍筆」「〔富士印〕」「齢八十六才」

【東都図17：向島牛御前社額堂・河鍋狂斎（暁斎）・長谷川雪堤画「茨木図」扁額】

同社額堂。横壱間計。板地。合作なり。

（縮図「狂齋画」「雪堤」）

【東都図18：向島牛御前社・川端玉章画「天岩戸図」扁額】

同社。

（縮図「奉獻 古川氏」「玉章」

【東都図19：三圍稲荷社額堂・「神馬図」扁額】

三圍稲荷社額堂在。横九尺・立五尺計。木偶なり。

【東都図20：王子稲荷社拝殿・鈴木芙蓉画「狐図」扁額】

王子稲荷社拜殿ニ在。横五尺計。絹地。極彩色。

（縮図「應需／芙蓉寫」）

【東都図21：王子稲荷社拝殿・小林永濯画「初穂献上図」扁額】

同社。横二尺程。小額なり。

（縮図「鮮斎永濯」）

【東都図22：伝通院内大黒堂・飯島光峨画「菩薩・羅漢問答図」扁額】

傳通院内大黒堂ニ在。絹地。三尺。壱間計。

（扁額「万延元申」「光峨畫」）

【東都図23：赤坂氷川神社額堂・狩野季信画「神馬図」扁額】

赤坂氷川神社額堂。幅壱間計。板地。

（縮図「狩野玉燕季信筆」）

【東都図24：日枝神社拝殿・三輪花信斎在栄画「猿の三番叟図」衝立】

日枝神社拜殿在。衝立なり。横六尺余。

（縮図「寛政己酉年六月十五日」「花信齋三輪藤原左榮謹圖」）[32]

【東都図25：浅草寺・沖冠岳画「四睡図」扁額】

（縮図「奉獻」「明治三年庚午」「春建辰月吉日」「世話人」「冠岳庸」）

【東都図26：浅草寺観音堂・寒川雲晁画「盟神探湯図」扁額】

観音堂。板地。二間計。

（縮図「雲晁寒川輝久圖」）

【東都図27：浅草寺観音堂・鈴木其一画「迦陵頻図」扁額】

観音堂ニ在。金地。横五尺計。

（縮図「噲々其一」）

【東都図28：浅草寺観音堂・長谷川雪旦画「綴引図」扁額】

観音堂ニ在。金地。立五尺。横三尺計。

（縮図「長谷川法眼雪旦六十三歳畫」）

【東都図29：浅草寺観音堂・川辺御楯画「長篠合戦賞功図」扁額】

観音堂。金地。三尺。五尺計。

（縮図「明治廿二己丑ノ秋」「南傳一／小原久兵衛」「源御楯」）

【東都図30：浅草寺観音堂・源南岱画「平安女人図」扁額】

観音堂ニ在。金地。巾二尺・立五尺計。

（縮図「大傳馬町三丁目」「村田商店[33]」「源南岱」）

【東都図31：浅草寺観音堂・歌川国芳画「一つ家図」扁額】

観音堂。金地。横九尺計。

（縮図「安政二年乙卯仲春。為／岡本樓主人之嘱」「一勇斎國芳寫」）

【東都図32：浅草寺観音堂・柴田是真画「柳風狂句合・提灯張図」扁額】

（扁額「柳風狂句合口画」「是眞」）

【東都図33：浅草寺観音堂・三代堤等琳（雪館）画「韓信股潜図」扁額】

韓信之圖。堤雪館筆。

さきに月岑ぬしハ此画を俗中の俗故、われこれをとらすといへり。成程風韻よろしき画にハこれなきも、其當時ハ嵩谷筆鵺退治と共ニ評判の額なりし由故、われハこれをも加へたり。

顔料なと濃厚にして品あしく、別ニ小札をつけ、雪舟十四世筆孫なと丶号せし所、或派の喜はさりし故ならん。今や汚色して衣類の紋様なと分明ならず。

観音堂ニ在。横九尺計。金地。

（縮図「雪舟十四世筆孫／堤雪館翁」）

【東都図34：浅草寺観音堂・長谷川法橋雪旦画「楠公桜井の別れ図」扁額】

観音堂ニ在。金地。横四尺位。

（縮図「長谷川法橋雪旦畫」「天保十己亥年二月」「敬白小関氏」）

【東都図35：浅草寺観音堂・墨海画「蘭相如図」扁額】

浅艸観音堂。板地。三尺・五尺計。

（縮図「黒海」[34]）

【東都図36：浅草寺観音堂・池田孤邨画「牡丹に孔雀図」扁額】

観音堂ニ在。竪五尺計。

（縮図「内藤氏嘱／孤邨池田三信」）

【東都図37：浅草寺観音堂・柴田是真画「茨木図」扁額】

観音堂ニ在。金地。三尺。立四尺計。

さきに月岑氏の摹せし王子稲荷社ニある鬼女ハ是より大にして三十才頃の作なり。今や額堂よりをろして社殿ニあり。是ハ七十才頃の作なるへし。

（縮図「是眞」）

【東都図38：待乳山聖天宮額堂・月岡栄山画「隅田川納涼船図」扁額】

待乳山聖天宮額堂在。横二尺計の小額なり。

（縮図「月岡榮山画」）

【東都図39：浅草寺観音堂・鈴木桃雲彫刻「五条橋牛若弁慶図」扁額】

浅草観音堂。横九尺計。板地。彫刻物なり。

（縮図）

【東都図40：浅草寺観音堂・水上景邨画「花卉に雉子図」扁額】

観音堂。横七尺計。板地。四季草花之圖。極彩色。

（縮図「景邨筆」）

【東都図41：目黒村蛸薬師堂・「碇と蛸図」扁額】

目黒村蛸薬師堂ニ在。金地。

（縮図「奉懸御寶前」「天明歳次癸卯九月」「願主／勝俣言玲」）

【東都図42：上野清水堂・諸星成章画「富士を望む図」扁額】

上野清水堂。板地。砂子マキ。横九尺計。

（縮図「明治己酉年」「成章画」）

【東都図43：市谷八幡宮・菅原忠雄画「神馬図」扁額】

牛込區市ヶ谷八幡宮ニ在。板地。横九尺程。

（縮図「菅原忠雄」）

【東都図44：愛宕神社・月岡芳年画「三者図」扁額】

愛宕神社ニ在。地紙砂子。立五尺計。月岡芳年の筆なり。

（縮図「應需芳年」）

序文にある「思ふニ余も藝林ニ遊ふものいかて其洩れたる、又其以後の奉納額を手寫し、一つハ研究ニ資すへく、疎影としふとも寫しをかハやとて、数年来神祠佛宇に参して摹せるもの」とあるように、天真は月岑の意思を継いで、扁額の記録をとらんとした思いが知られる。まさに研究に資すべき資料である。また扁額のみならす、衝立絵も縮図として所収している。

６．浅草寺絵馬・扁額と月岑の「武江扁額縮圖」

月岑の自筆本「武江扁額縮図」に収録された58点の扁額のうち、もっとも点数の多かった寺社は13点の浅草寺観音堂である。それに続くのが7点の神田明神社、3点の三圍（三囲）稲荷社、同じく3点の湯島天満宮となり、いかに浅草寺の扁額の割合が大きいかが知れる。

浅草寺では、現在でも245点の絵馬・扁額が伝存するという。浅草寺は、度々の回禄に遭い数多くの絵馬が失われたというが、それでも現存する作品の質の高さと量の多さは、誇るべき名刹の伝統文化の重厚さを強く感じさせる。

浅草寺の絵馬に関しては、昭和53年（1978）五重塔内絵馬堂における「浅草寺絵馬展」の開催に際し、『金龍山浅草寺絵馬図録』（解説・林功）が上梓された。また平成2年（1990）には、浅草寺絵馬調査団（宮次男・河合正朝・関口正之・浦井正明・坪井利剛）による『浅草寺絵馬扁額調査報告』（東京都教育庁社会教育部文化課刊）が刊行された。これらにより、現有する浅草寺絵馬の全容が紹介された。またその後の浅草寺絵馬・扁額の調査をもとに、平成23年（2011）11月に『浅草寺の絵馬』が金龍山浅草寺編・刊で出版された。そして今日、再び河合正朝慶応大学名誉教授を中心にした台東区文化財調査の一環としての精査が進行中で、現存する全ての扁額の裏面や細部の調査が行われている。

浅草寺の絵馬や扁額に関しては、上記の報告書や図録の刊行以前に、江戸時代からの編纂物でも知られている。松平（池田）冠山編の『浅草寺志』がその第一のものであろう。さて、浅草寺本堂（観音堂）には、古くから観音信仰の証しの一つとして絵馬が掲げられたという。江戸時代に入り多くの絵馬や扁額を掛けるために、とくに絵馬堂が建立された。寛政10年（1798）年の「観音堂境内諸堂末社諸見世小屋掛絵図」には、絵馬堂が本堂の手前東側に見える。この絵馬堂が「額堂」とも言われ、『浅草寺日記』や『浅草寺志』にも登場する。近代に入り、明治30年（1897）頃浅草寺本堂外陣に多くの絵馬や扁額が掲げられている様子が、山本松谷の挿絵（『東京名所図会（風俗画報臨時増刊）』）からもうかがえる。また浅草寺の歴史や文化財についての研究の成果をまとめた網野宥俊編著『浅草寺史談抄』にも、絵馬や扁額のことが詳しい。

さて、山内天真が「われさきに齋藤月岑ぬしの手寫せる繪馬鑑を見て頗る感あり」と序文の巻頭に述べた如く、月岑に見習って模写して編じた天真の「東都繪馬鑑」には、全44図が所収されている。そのうち浅草寺の扁額は15図である（[口絵20]～[口絵31] 参照）。「而してそれと額とを對し見るに、其頃奉納せしはかりなる額も、今ハ丹青剥落して、分明ならさるもの多く、或ハ天災ニ罹りて失ハれたるものも少からす。されハ今在るものも、やかてハ雲霧ニ濕り、失せんも計り知へからす」と消耗している扁額の現状を憂い、そして「又其以後の奉納額を手寫し、一つハ研究ニ資すへく、疎影としふとも寫しをかハやとて、数年来神祠佛宇に参して摹せる」と、月岑の摸写には無い、また近代に奉納された扁額を意図して手写したことを述べる。この結果、月岑の「武江扁額縮圖」から漏れた作品、それ以降に新たに奉納された作品を所収しているので、浅草寺に関して言えば、月岑の縮図13点に天真の14点を加え、都合27点の幕末から明治43年頃までの浅草寺扁額を見ることができる。

天真が、「當時ハ繪画展覧会多く、昔時の如く奉納額ハ盛ならねと」（序文）と言う如く、まさに江戸

時代のギャラリーとして機能していた寺社への奉納扁額は、近代社会の中で絵画展覧会という形へ移行した状況下であった。この少しずつ減少する奉納扁額を「研究ニ資すへく」とあるように、後世の我々にとって大いに有意義な摸写図を残した山内天真、そしてその先鞭をつけた斎藤月岑の扁額縮図を記録した文化活動を高く評価したい。

おわりに

さて、斎藤月岑の江戸を中心とした絵馬や扁額の縮図を記録した「武江扁額縮圖」（自筆本）と、それから抜粋した浄写本ともいうべき「大江戸絵馬集」（狩野文庫本）。そして明治期に山内天真が模写した「武江扁額縮圖」と天真が新たに収録した「東都繪馬鑑」を分析し、紹介してきた。狩野亨吉文庫の「大江戸絵馬集」は、月岑の名前を識した序文をもつが、松廼舎文庫旧蔵の月岑自筆本（影印）と比べてみると、書風が違うようである。狩野文庫本はペン書きであり、自筆本は筆書きであるので、明治期の月岑の書風が判明しない限り、判定は難しい。また画風も違うようである。

こうしたことから、狩野文庫の「大江戸絵馬集」は、今のところ月岑直筆であるか判断に迷うとことである。「大江戸絵馬集」は、浄写本として美麗な仕上げとなっているが、月岑の「武江扁額縮圖」を見て、誰かが抜粋模写し彩色を加えたものとも考えられる。

「大江戸絵馬集」を最初見たとき、縮図として何故か違和感があったのは、一図を見開き頁で使っているのに、扁額図を分割して描いているということであった。これは自筆本「武江扁額縮圖」を見た時も、同じ思いであった。しかし、よくよく月岑の序文を見てみると、当初より月岑が出版を考慮に入れていたため、一図を両頁にかけて割り付けして描いたことからの結果であることが分かった。つまり、自筆本の「武江扁額縮圖」も出版のための稿本であり、「大江戸絵馬集」もその浄写本であったのである。文政期の北川春成・合川珉和編の『扁額規範』や、天保期の藤彦編『厳島扁額縮本』に大きな影響を受けて、江戸の町名主斎藤月岑が江戸の扁額縮図を上梓しようと試みたが、稿本で終わってしまったのである。江戸の地誌や年表などを編じて、その多くを出版した月岑にとって、さぞかし無念であったであろう。幸いなことに、「武江扁額縮圖」は大正期になって稀書複製会が複製本を刊行した。また月岑の思いを、明治末年に山内天真が継いで「東都繪馬鑑」を編じた。

斎藤月岑や山内天真の行為は、今日の我々に江戸の絵馬や扁額の存在をリアルに伝えてくれる貴重な文化財資料である。またこうした大事な資料を求め、東北大学へ入れた狩野亨吉の功績を大いに讃えたい。

【註】

1）当時の東北大学副学長兼附属図書館長野家啓一氏と共同研究について協議し、東北大学側から同大史料館の曽根原理氏（現、助教）と永田英明氏（現、准教授）、附属図書館から千葉正樹氏（現、尚絅学院大学教授）が参画。

2）平成17年11月の仙台・白松ロフトホールにおける狩野文庫の食文化資料を中心とした企画展「江戸の食文化～スローフードのルーツをたどる～」に関連した11月20日のせんだいメディアテークにおける11月20日の記念シンポジウム「江戸の食文化とスローフード」に原田信男、大森洋平、若生裕俊各氏とともに小澤もパネリストとして参加。

平成18年11月のせんだいメディアテークにおける東北大学創立100周年・宮城県図書館創立125周年記念事業としての同大学附属図書館主催の企画展「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー～」に関する講演会（11月12日）でテーマ「江戸の遊び」（小澤弘）で講演。

また平成19年９月１日～10月14日に、江戸東京博物館５階展示室で、東北大学創立100周年記念展示「東北大学の至宝―資料が語る１世紀―」が開催され、また11月２日から12月９日まで仙台市博物館で同じ展示会が開催された。その仙台会場の折の、11月25日当館の竹内誠館長が東北大学からの要請で「江戸文化を語る―狩野文庫の魅力―」のテーマで講演した。また当館１階において平成19年９月26日～11月18日の期間に東北大100周年を記念して東北大学・江戸東京博物館・朝日新聞社の共済事業として特別展「文豪ー夏目漱石とまなざし」展を行った。

３）曽根原理「狩野文庫への招待」「東北大学附属図書館調査研究室年報第１号」2012年３月

４）自筆本では「ハ」は「日」とある。

５）自筆本では「古」は「百」とある。

６）自筆本では「矢立の筆にて」は「矢立の筆をもて」とある。

７）稀書複製会叢書の解題

「武江扁額集　一冊　23.3×16.4センチ

本書の原本は齋藤月岑の自筆にして、江戸市中の神社佛閣に奉納せられたる著名の扁額を模寫し、「松濤雜纂」第二巻に「武江扁額縮圖」と小題して収めたるものなり。今假に「武江扁額集」と改題して刊行す。

本書を編し終りたる文久二年冬の自序に拠れば、扁額を集めたる繪本は、元禄の頃に「額の評判」あり、安政の頃には。京都の畫匠北川春成、合川泯和の「扁額規範」あり、また春成作圖、速水春曉齋解説の同續篇あり、藤彦の「嚴島扁額縮本」ありて世に行はれしより思ひ附き、江戸市中の神社寺院等に在る名譽の扁額を探り其縮圖を作りたるものの如し、巻中収むる所の縮圖は、月岑が四十九歳の春より秋にかけての、嘉永五年の臨摹に成るもの歳多數を占むるを見れば、此事業に着手して努力せしは、多分該五年よりなるべし。但し其以前の作圖あるは同著者が「江戸名所圖會」の完成に腐心し居りし文政三年より天保七年の間、未だ扁額圖蒐集の意志の深く存せざりし頃、大著述の餘業として偶然摸寫し置きたるものならん歟。元来江戸には古き扁額乏しく、寛永十九年の年號ある淺草觀世音堂内の繪馬を最古とし、其他偶今い保存せらゝものあれど、二百年以上に出づるは無く、剰へ天災又は雨露の害に遭ひて破損し、殆ど遺存するも稀なれば、全巻五十枚を選集し得たる苦心思い遣るべし。

松濤軒は、もと先代長秋の號なるが、月岑之を襲ひて雜纂に其號を冠せしめたるらし。此「松濤軒雜纂」といふ自筆本は未定稿にして、六巻より成れども、一巻より四巻に至る四册は松廼舍文庫に五巻、六巻の二册は東京帝國大學附属圖書館に分蔵せられあり。其内容は四巻までは挿圖を主とし五、六の二巻は記事を主とせり。」

８）国会図書館本には、別添ラベルにペン書きの架蔵番号「15-538」が、また朱文方印「帝國圖書館印」、朱文長方印「大正9. 1. 8内交」の収蔵印が捺されている。

９）現存する浅草寺絵馬では、狩野洞白愛信の同一構図の作品がある。

10）絵師の「嵩濤」は、狂歌名を「絵馬屋額輔」という人物。瀬川富三郎の『諸家人名 江戸方角分』によれば、号額輔、絵馬屋、新堀端、奥田建蔵」とある。また狩野快庵編『狂歌人名辞書』によれば「絵馬屋額輔（初代）。初号時雨庵空言、別号画賛人、画名嵩涛、又英一翠とも名乗れり。東都赤坂の人。幼名松下虎之助、後奥田賀久輔と改め、浅草新堀に移転して質屋を営めり。狂歌を節松嫁々に学び、後ち轡連の判者となる。安政元年正月廿七日歿す。年七十四。赤坂一ツ木浄土寺に葬る」とある。

11）「綱の伯母」とは、茨木童子が京の一条戻り橋で頼光四天王の一人渡辺綱に腕を切り取られたのを取り戻すため、綱の伯母の姿に身をやつして渡辺綱に近づき、油断する綱から取り戻した腕を持ち鬼女と化して逃げる様子を描く。

12）この図は、山内天真模写本では別のページに独立してある。

13）山内天真模写本では「八マン室万」となっている。

14）扁額の説明に「朱漆。金にて高く置上たり。フチ真鍮メツキ」とある。

15）山内天真模写本では「三日」となっている。

16）山内天真模写本では「巳」となっている。

17）石田玉山は、実際は大坂の岡田玉山の門人であり、月岑の註記は逆で間違っている。この図は「法橋玉山」とあるので岡田玉山（1737-1812？）のことか。法橋玉山は、文化５年ないし文化９年頃に亡くなったと言われるが不明で、この扁額にある「文政庚辰晩春」の款記が正しいとすると、岡田玉山は文政３年（1820）まで存命していたことになる。石田玉山と岡田玉山が、当時から認識が混乱していたことが知れる。

18）山内天真模写本では「捺」となっている。
19）山内天真模写本では「文久二壬」となっている。
20）この図は、山内天真摸写本には別の場所に入れる。
21）山内天真模写本では「少女」となっている。
22）大川端の細川侯中屋敷は、浜町河岸にあった屋敷である。
23）山内天真模写本では「玉燕」となっている。「玉亀」は、井上和雄編『浮世絵師伝』によれば、安政５年（1858）生まれ、飯沼氏、玉英門人、号稀堂と称したという。
24）「箋」は「わく」で糸枠のこと。
25）猩々緋の赤熊を過打った７人が伏せた大杯を担ぐ図は、猩々講の儀礼であろうか。あるいは演芸か。
26）「寛一」は、画家の荒木寛一のこと。文政10年～明治44年（1827-1911）。画師・荒木寛快の養子となる。名は綱、字は子正、別号は梅陰斎。
27）「狂言福の神図」は、英一蝶の同様の構図の先行作品がある。
28）「勝文翁」とあるのは押絵師の勝文斎のことで、鮮斎永興の描いた図を押絵張りとしたものか。
29）松明を持った侍がいるので、『伊勢物語』の「武蔵野」の段を想定した図かと思われる。
30）「長雲斎龍淵」は、上方の絵師山田龍淵のことか。
31）綾瀬川山左衛門が大関昇進を果たしたのが明治５年３月場所という。この篇額は、大関昇進を祝って翌６年５月に奉納したものか。
32）「左榮」とあるが、「在榮」の写し間違い。『増訂武江年表』寛政九年四月二十七日の条に「画人三輪花信斎卒す。名は在栄、猿を写す事殊に上手なり。河崎の平間寺にも猿を画きし額ありしが今は見えず。四谷勝興寺に葬す。」とある。
33）「村田商店」とあるが、現在浅草寺に伝わる扁額には「村田両店」と金字で書かれている。
34）「黒海」は「墨海」の写し間違い。